

第2章 岡崎城跡の概要

2-1 史跡指定の概要

- ◆指定名称 岡崎城跡
- ◆指定年月日 昭和37年(1962)6月15日指定、平成28年12月26日追加指定
- ◆指定面積 98,908 m²
- ◆所在の場所 岡崎市^{こうせいちょう}康生町561番地1ほか124筆 岡崎公園
- ◆指定理由

(申請調書)

岡崎城は、三河守護職であり大草城主^{おおくさ}の西郷弾正左衛門頼嗣^{さいごうだんじょうざえもんよりつぐ}が享徳元年(1452)から康正元年(1455)にかけて築城し、その後松平清康(後の徳川家)に譲り、以来徳川幕府発祥の地となり、田中、本多、水野、松平、本多を経て、明治四年廃藩、同六年から七年に取りこぼちとなったが、同八年以来公園として本丸の保存につとめ、昭和三十四年三月三十日三層五重の天守閣と井戸やぐら、附やぐらが復元され、一層昔をしのばしめるものである。

(指定調書)

西郷弾正左衛門^{つぎより}頼^{つぎより}の築城に成り、松平清康城主のとき家康城中に生る。田中、本多、水野、松平、本多氏居城し、明治6-7年取^{とりこぼち}毀となり、岡崎公園として市民に親しまれており、昭和34年3月天守閣、井戸やぐら、付やぐらの復元がなり、龍頭山^{りゅうとうざん}上に観光文化センターとして^{そび}聳えている。城郭としての内壕、えな塚、産湯の井等が保存され史跡として重要である。



図2-1 市史跡指定位置図

2-2 自然環境

(1) 岡崎城の位置と立地

岡崎市の地形は、北東部は中部山岳地帯に連なる三河山地、西部は広大な岡崎平野、南部は三河湾国定公園に含まれる山地となっている（図2-2）。地質としては、北東部の山地は白亜紀の花崗岩類を基盤とし、南東部の山地は同じく白亜紀の変成岩類が基盤となる。この花崗岩類は、岡崎城跡の石垣石材として利用され、近世から現在まで続く岡崎の石工業



図2-2 岡崎市の地形（出典：岡崎市緑の基本計画）

の発展につながっている。丘陵地には新第三紀の砂岩、シルト岩、礫岩が分布する。平野部は、第四紀完新世の礫・砂からなる河川堆積物が覆い、平野部の西側は、市域を南北に貫く矢作川が運んできた礫、砂、粘土が堆積してできた沖積層や洪積層により台地が形成されている。

岡崎城は、市の中央部、康生町を中心に所在し（図2-3）、市街地を東西に貫流する乙川（旧菅生郷の岡崎城周辺は菅生川と呼ばれる）北岸、北東の愛宕丘陵から延びる半島状地形の南西端にあたる標高約24mの龍頭山に本丸が位置している。岡崎城が立地する場所は矢作川と菅生川（乙川）との合流点とその先に広がる低地を睨む要衝の地である。矢作川が西方に、菅生川が南方に対する天然の守りとなっている。



図2-3 岡崎城跡周辺の地形（出典：新編岡崎市史14に加筆）

地形的にみると、本丸・二の丸を含めた主な部分は菅生川北側の河岸段丘上に立地している。この段丘は礫を多く含む堆積物で形成されており、岡崎市内の大部分を形成している中位段丘で、安定した地盤となっている。田中吉政の城下町整備時は北東に向かって高くなる段丘を削り、その土で南西の低地を埋め立て、城下町等の造成を実施した。

当初の岡崎城は段丘上の安定した部分に築かれたが、整備拡張に伴い次第に沖積低地にも曲輪が造られていった。菅生曲輪では菅生川の旧流路であった部分を堀に利用し、平坦面を造り出して屋敷地として使用している。白山曲輪も本丸西側の湿地を埋め立てて築造している。約 60m と城内で最も幅の広い大林寺郭堀は、段丘に元々入り込んでいた谷を利用したと推定されている。このように原地形を活かしながら縄張りが造り上げられていった。

（２）史跡指定地内の自然環境

①概況

岡崎城の現在の植生は旧城跡の植生のみならず、公園整備のため近代以降に人工的に植栽したものとの両相から形成されているが、巨樹も多く存在し、多様な植物相と動物相が構成されている。岡崎公園内の自然環境に関しては昭和 35 年(1960)と平成 9 年から 10 年にかけて調査が行われ、様々な植物・動物などの所在が明らかになっている。この調査の結果、植物や動物の中でも貴重種とされているものも確認されている。石垣の隙間に巣を作るキシノウエトタテグモは県内でも希な蜘蛛類であり、「キシノウエトタテグモ生息地」を平成 19 年に市指定天然記念物に指定している。古城の石垣に特徴的にみられるミヤマハイゴケ、生物にとって有毒である青銅類に好んで生息するホンモンジゴケなどの蘚苔類がある。また水堀などに生息する魚類、それらを食料としている鳥類など、都心では珍しい食物連鎖が構成されている。



写真 2-1 キシノウエトタテグモ
(市指定天然記念物)

②植生と植栽

一般的に近世城郭にはマツを植えることが多く、その他には籠城時に必要な実のなる樹木（ウメ・クリ・カヤなど）を植えることが多かった。城郭俯瞰図である「龍城図」（図 2-14）には内郭全体にマツが描かれている。二の丸御殿の指図（図 2-12）には中庭に「松」、「桜」、「紅葉」、「柳」と書き込まれ、城近世後期の絵図には菅生川端から白山曲輪に沿って杉木立が描かれる（資料-7 ④）。

現在確認できる樹木の内、マツは近世末期のものと思われる。空堀である清海堀の内部や周辺にタブノキ、ヤブツバキ等の暖地性樹木やムクノキの大木が自生しており、城郭の旧環境をうかがうことができる。

岡崎公園並びに菅生川堤防では、明治 36 年(1903)からサクラやカエデの植樹が始まり、明治 42 年には坂谷曲輪と白山曲輪間の現在、龍城堀と呼ばれる水堀を利用し開削された伊賀川堤防沿いも含めて 3,000 本以上を植えている。この植樹活動は大正 8 年(1919)に始まった 5 箇年計画での岡崎公園改修事業にも引き継がれ、大正 6 年(1917)には近代日本の洋風公園の

先駆者である本多^{ほんだせいろく}・田村^{たむらつよし}剛に依頼した『岡崎公園設計案』（資料-9 ①）が作成され、これを参考にしながら7,300株を植樹した。

『岡崎市戦災復興誌』（昭和29年）に拠ると、戦後直ぐは曲輪から堀底まで樹木が育っていた記録があるが、その後高齢化による枯損等で往時の樹木のほとんどが消失している。現在見られる樹木は、戦後に植えられたかあるいは実生木が育ったものが主であると思われ、公園内にはムクノキやエノキあるいはケヤキ等が大きく育ち、その一部は岡崎市の「ふるさとの名木」にも選定されている。

サクラに関しては、戦後昭和26年、29年、32年に補植が行われ、平成2年には岡崎公園が日本さくら名所100選に選ばれるに至っている。サクラを始めとした園内の豊かな樹木は、都市の緑として重要な要素であり、岡崎城や公園を訪れる人々に大きな安らぎを与えている。

平成27年度には岡崎公園内の樹木調査を実施し、樹種名や形状等を確認している（第2章2-5(3)参照）。



写真2-2 史跡岡崎城跡（岡崎公園）周辺の緑地（国土地理院航空写真平成22年）

2-3 社会環境

(1) 交通

岡崎城跡内の道路は、東西には、東京都中央区を起点として大阪市へ至る国道1号が横断し、南北には、蒲郡市を起点として岐阜市へ至る国道248号が縦貫している。国道1号は、旧三の丸等の内郭を貫通し、国道248号は総構えの西側に沿う。

鉄道は、名古屋鉄道名古屋本線の東岡崎駅及び岡崎公園前駅と愛知環状鉄道の中岡崎駅が近接する。史跡指定地である岡崎公園まで東岡崎駅より1.2km、岡崎公園前駅及び中岡崎駅より0.7kmであり、徒歩15分程で至る。

その他、各駅よりバス路線として名古屋鉄道バスと、総構えの東西を横断し岡崎公園と市役所、中岡崎駅を結ぶ岡崎市コミュニティバス「まちバス」が運行されている。

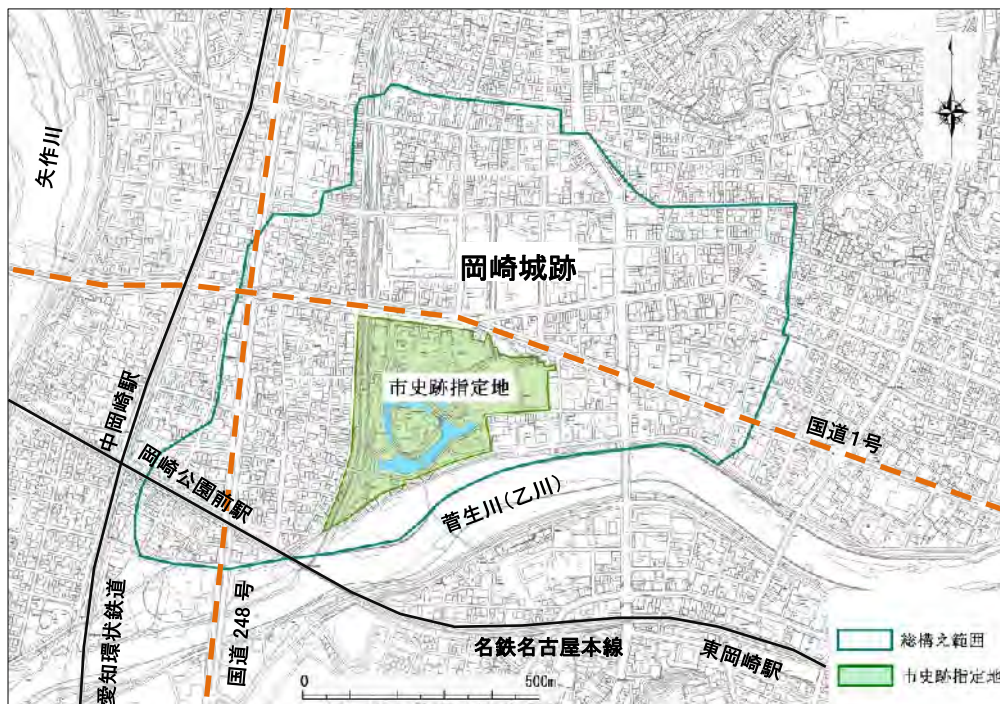


図2-4 岡崎城跡周辺の交通網図

(2) 法規制

岡崎城跡の用途地域（図2-5）は、大部分が商業地域であり、一部が近隣商業区域、並びに第一種住居区域である。次に岡崎公園、籠田公園、御旗公園が都市計画公園、乙川河川敷が都市計画緑地となっている。

史跡指定地は、昭和37年6月15日に岡崎市文化財保護条例により岡崎市指定史跡として指定され、岡崎城総構えは、外堀に囲まれた内郭範囲及び総堀跡が文化財保護法による埋蔵文化財包蔵地となっている。次に、岡崎公園並びに乙川河川緑地周辺域が岡崎市風致条例で「竜城風致地区」として、昭和45年6月に第3種風致地区に指定されている。また、景観法及び「岡崎市水と緑・歴史と文化のまちづくり条例」（平成15年）に基づき策定された『岡崎市景観計画』（平成24年）により、大樹寺三門より岡崎城天守を望む帯状の範囲が「大樹寺から岡崎城への眺望景観形成重点地区」に指定されている（図2-25）。

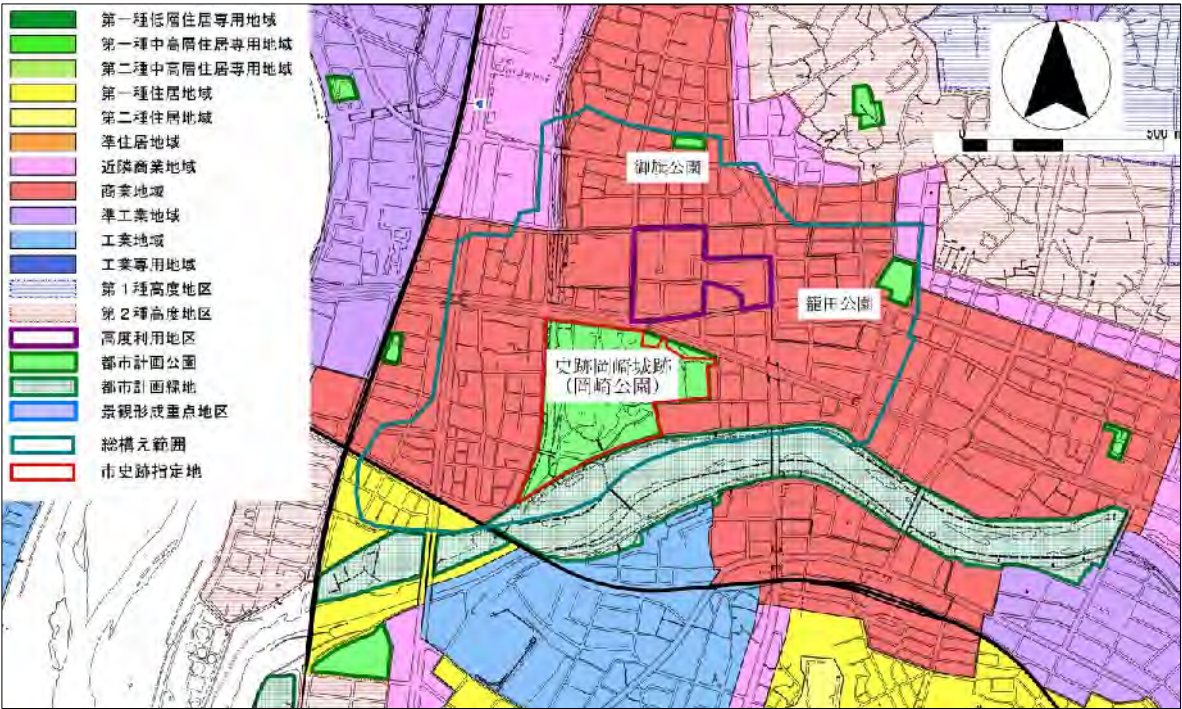


図 2-5 用途地域図（平成 28 年）

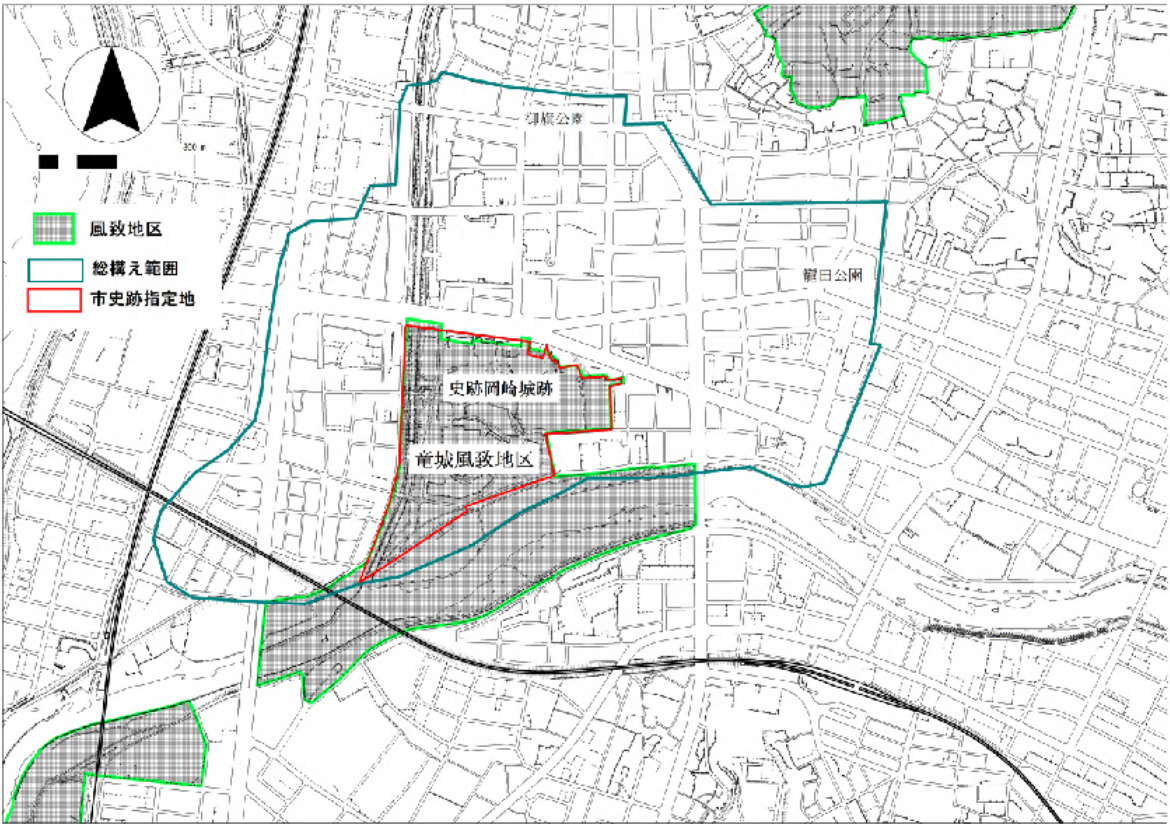


図 2-6 規制図（風致地区）

表 2-1 風致保全方針（竜城風致地区）

地 区 名	たつき 竜城風致地区	面積	約 27.2ha	指 定 年月日	(当初)昭和 16 年 9 月 27 日 (最終)昭和 45 年 6 月 15 日
風致類型	緑地保全系：公園・神社仏閣・歴史的文化財型 (歴史的に意義のある史跡を中心とした自然的景観の良好な地域／公園緑地を中心とした自然的景観の良好な地域)				
指定理由	風致地区の指定により、岡崎城を中心とした良好な歴史的・自然的景観を維持する。				
地区特性	(地区の現況) ・岡崎城を核とする岡崎公園と殿橋下流の乙川河川緑地を中心とした地区である。 ・徳川家康公生誕の地である岡崎城は、岡崎市の歴史的シンボルとなっている。 ・岡崎公園は桜の名所として知られている。 (地区の歴史) ・岡崎城は三河の守護代西郷頼朝が康正元年（1455）に築城。 ・その後松平氏の居城となり、天文 11 年（1542）に松平竹千代（後の徳川家康）が城内で生まれた。 ・明治 6 年～7 年にかけて取り壊しとなったが、昭和 34 年に三層五階の天守閣と井戸櫓、附櫓が 86 年ぶりに復元された。				
主 な 風致要素	(自然的環境) ・岡崎公園内には大木を含む樹林地があり、良好な自然的環境を形成している。 (自然的景観) ・岡崎公園内の樹林は、岡崎市の中心市街地におけるまとまった緑として、良好な自然的景観を形成している。 ・地区の南側からは、乙川の流れと堤防沿いの桜並木、更に岡崎公園の樹林が一体となった良好な自然的景観を望むことができる。 (その他) ・岡崎城を核とした良好な歴史的景観を形成している。				
種 別	第 3 種：全域				
保全目標	岡崎城を中心とした良好な歴史的・自然的景観を有する地区として、地区全体の景観の維持を図る。				
風致保全 方 針	(保全方針) ・岡崎城を核とした良好な歴史的景観の維持を図るために、岡崎公園内の樹林地の保全を図る。 ・乙川河川緑地を中心とした自然的景観の維持を図るために、堤防沿いの桜並木の保全を図る。 (育成方針) ・岡崎公園の整備にあたっては、歴史的、自然的景観に配慮した植栽や施設整備を行い、また、公園内の樹林の管理については剪定や補植等適切に行い、風致の育成を図る。				
地区の区分ごとの定義 第 1 種風致地区：特に良好な自然的景観を有する樹林地、水辺地等の地区で、現存の景観を保全することが必要なものをいう。 第 2 種風致地区：良好な自然的景観を有する樹林地、水辺地等の地区及びこれと一体となった良好な住宅地等の地区で、現存の景観を保全することが必要なものをいう。 第 3 種風致地区：第 1 種風致地区及び第 2 種風致地区以外の地区をいう。					

2-4 歴史環境

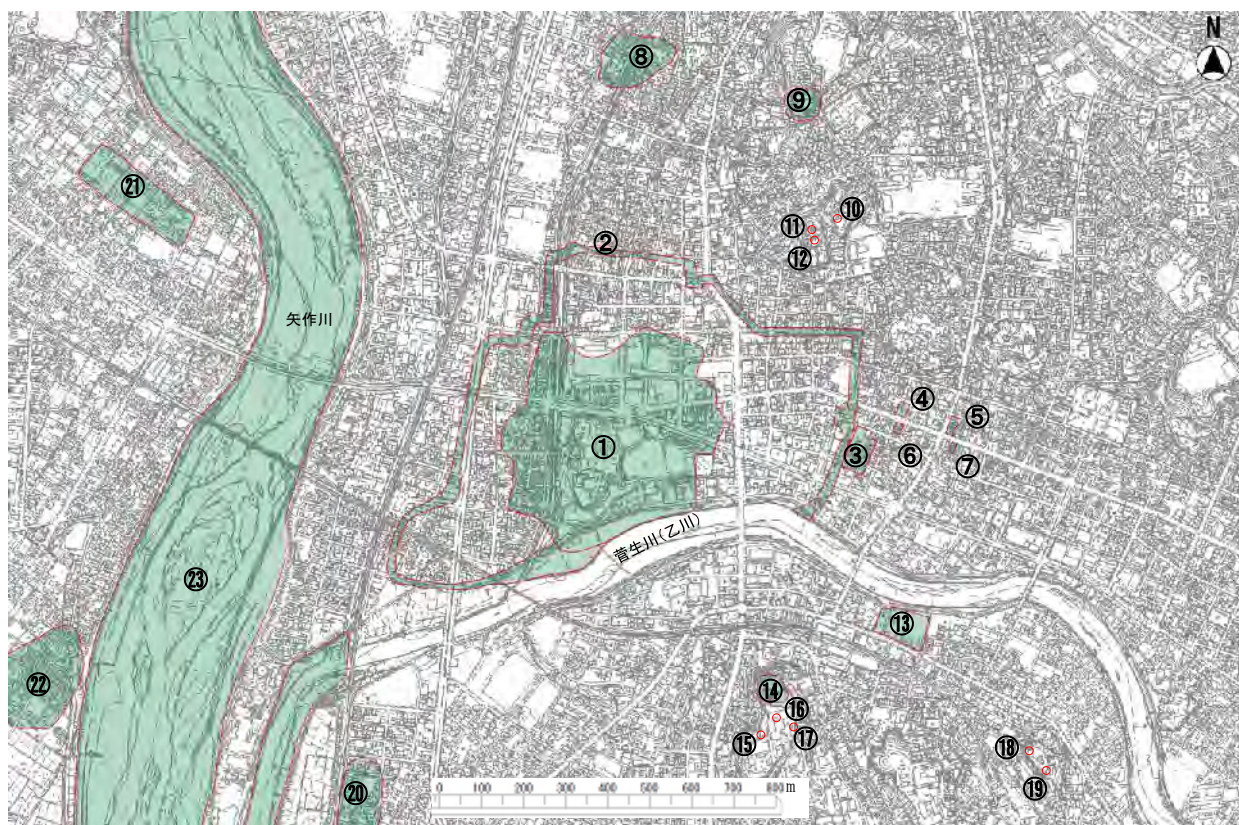
(1) 岡崎城の歴史

① 築城以前の歴史と周辺遺跡（図2-7）

岡崎城跡の発掘調査では、遺物として旧石器時代の細石核をはじめ縄文時代～中世まで各時代の土器類が出土し、弥生時代の土坑や鎌倉～南北朝時代の鍛冶遺構が確認されており、河川に近い安定した段丘上で人々の営みが連綿と続いていたことがうかがわれる。

周辺の遺跡として、矢作川の左岸には縄文時代晩期の拠点集落を中心とした鎌倉時代までの複合遺跡である真宮遺跡（国史跡）、菅生川（乙川）南岸の西郷氏の居城と推定される平岩城跡では古代の集落が確認されている。

北方には矢作川左岸の段丘西縁に足助・信州へつながる足助街道（中馬街道・塩の道）に沿い、松平譜代の酒井氏居城の井田城跡をはじめ能見城跡、松平氏の勢力拡大の拠点となった岩津城他の岩津七城と言われる城館群、細川城山城などの中世城館が展開している。



- | | | | |
|----------------|----------|-----------|-------------|
| ① 岡崎城跡 | ⑧ 能見城跡 | ⑭ 竜海院遺跡 | ⑳ 真宮遺跡、影山城跡 |
| ② 岡崎城総堀跡 | ⑨ 愛宕山遺跡 | ⑮ 西郷塚第1号墳 | ㉑ 矢作城跡 |
| ③ 御馳走屋敷跡 | ⑩ ミツ岩古墳 | ⑯ 西郷塚第2号墳 | ㉒ 能光遺跡 |
| ④ 岡崎宿本陣跡(中根家) | ⑪ 甲山第1号墳 | ⑰ 西郷塚第3号墳 | ㉓ 矢作川河床遺跡 |
| ⑤ 岡崎宿本陣跡(服部家) | ⑫ 甲山第2号墳 | ⑱ 仲ヶ入第1号墳 | |
| ⑥ 岡崎宿本陣跡(大津屋) | ⑬ 平岩城跡 | ⑲ 仲ヶ入第2号墳 | |
| ⑦ 岡崎宿脇本陣跡(桔梗屋) | | | |

図2-7 岡崎城跡と周辺の遺跡（埋蔵文化財包蔵地）

②中世（西郷氏の築城～松平氏・家康の居城）

中世には矢作川渡河点の両岸に矢作東宿・西宿が栄えるようになる。源氏ゆかりの地であり、『吾妻鏡』には嘉禎4年(1238)4代将軍源頼経みなもとのもりつねの上洛時に、矢作宿の周辺にあった三河守護職の足利義氏亭を宿所としたとあり、三河守護所が八帖町から明大寺町の付近に置かれていたと推定されている。室町時代の応永6年(1399)以前には、幕府主導で南流する菅生川（乙川）に六名堤を築造し西の矢作川へ繋げ、双方の舟入が可能となった。

岡崎城のはじまりは、永享年間(1429～1441)に菅生川南岸の明大寺付近に居館を構えたとされる西郷弾正左衛門頼嗣よりつぐ（頼頼）により、享徳元年(1452)から康正元年(1455)にかけて、菅生川北岸の龍頭山と呼ばれる半島状段丘の先端に、北方に対する砦として築かれた（『龍城中岡崎中分間記』等）ことによる。築城当時は、菅生川南に東海道が通り、明大寺が岡崎と呼ばれ、西郷氏の居館が元岡崎城にあたる。龍頭山の城は、近世の地誌類によると龍城とも呼ばれ、その範囲は頼嗣（清海入道）の名が伝わる現在の清海堀で仕切られた本丸程度であったと考えられている。

その後享禄4年(1531)に安城松平氏4代清康が明大寺より現在地へと本拠を移し、本格的な岡崎城を構えた。城域を拡大し、城郭周辺には甲山寺・大林寺・龍海院りゅうかいいんを計画的に配置した。

天文11年(1542)岡崎城において徳川家康が誕生した。幼少期の家康は人質として他国で過ごすが、永禄3年(1560)の桶狭間合戦を契機に自立し、岡崎城に復帰した。ここを拠点として永禄8年には三河統一を果たした。家康は嫡子信康のぶやすを岡崎城主とし、元亀元年(1570)に浜松城へ本拠を移すが、岡崎城は天正18年(1590)に家康が関東移封となるまで徳川領国三河の他の城を束ねる本城であった。家康居城の間にも、「当城永禄年中権現様御縄張之由」（『龍城中岡崎中分間記』）、「権現様の御縄張」（『岡崎領主古記』）と記される改修が行われている。武田氏や豊臣秀吉たけうじに対峙するため、特に天正13年(1585)に岡崎城代の石川数正が豊臣方へ出奔した際には、機密ろくえいの漏洩を防ぐため直ちに城郭の改修が行われた。城下町については、父祖菩提等のため松應寺（永禄3年）、随念寺（永禄6年）、誓願寺（永禄9年）を北東の丘陵地に創建し、他の寺社とともに城の守りとした。また、後世の資料になるが城下の広がり把握する参考として、家康岡崎在城時の家臣屋敷割が記される近世中期の冊子『東照公岡崎御在城記』・絵図（三州岡崎城図・内閣文庫蔵）等がある。家臣団は段丘上と菅生川端から能見にかけ分布するが、積極的な城下町建設は行われず、家臣団は城下に集住せずに居城を別にもっていたとされる。また家臣団は東方の根石、大平、岡、菅生南岸の六名の中世東海道に沿う地域にもまとまっていた。その他、連尺町の商業者が御用商人化していたとされ、後に専売の特権を得て城下を繁栄させていった。

③近世（田中吉政の総構え造成～譜代大名の岡崎藩）

家康の関東移封後は豊臣家臣の田中吉政が入城した。吉政は東国の家康に備える重要拠点として岡崎城城郭の整備・拡張を進めた。東・北・西の外周には、後世に田中堀と呼ばれる総構えそうがまの堀を巡らせ、土塁を築き、城の範囲を画定した。また、沼地を埋め立て松葉・板屋・材木・肴・田町等を造成し、旧来の六地藏・横・連尺・榎町と連なる一大城下町を建設して、

近世岡崎城下町の基礎を築いた。その他、東海道を城下に引き入れ、矢作川の築堤を行い乱流する流路を一本化するなど、多くの事業を行った。

慶長5年(1600)の関ヶ原合戦の後、家康が征夷大將軍となり江戸幕府を開くと、家康ゆかりの岡崎には、江戸時代を通じて代々譜代大名が配置された。慶長6年(1601)に本多氏(本多広孝系・前本多家)が入封した。初代本多康重は、総構えの東に伝馬町を創設して東海道を整備し、東馬出しを築造した。また、家康の命により大林寺郭堀を開削して(大林寺文書慶安年間書上控)東海道を北側へ大きく迂回させ、郭内外を区分することで街道からの攻撃に対する守備体制を強化した。2代本多康紀は、元和3年(1617)に天守を三層三階地下一階の望楼型複合式で再建し、城内を大改修した。3代本多忠利は、寛永年間(1624~1643)~正保元年(1644)までに菅生川に籠崎堤を築き、菅生門から稗田門にかけての曲輪周囲と菅生川端の石垣整備(『龍城中岡崎中分間記』)を行い、菅生川の旧河道が中堀となり、流路は南に寄せられた。城郭南西の強化とともに、築堤と護岸工事による治水が図られた。また城内に通じる各町口8箇所^{きょうおう}に木戸を設置した。寛永11年(1634)、3代將軍徳川家光の上洛の際には忠利が饗応に心を尽くしたことにより、5千石加増されている。



図2-8 岡崎城絵図 (前本多家時代・江戸時代前期 西尾市岩瀬文庫蔵「三州岡崎図」部分)
菅生曲輪東の堀が掘られておらず、菅生川に籠崎堤が築かれていない。

前本多家の後、正保2年(1645)に入城した水野^{ただよし}忠善は、東海道の東西出入口となる籠田総門・松葉総門を設け、内郭と東海道が近接する稗田門^{ますがた}の枳形と木戸4箇所を増設して郭内の更なる防御を図った。多数の家臣団の居住地を確保するため六地藏・祐金・唐沢町の町人町を郭外に移転させ武家屋敷とし、身分制による居住区域の区分を行った。こうした整備により、岡崎城の近世城郭としての形態が完成された。

17世紀前半における整備・拡張により、岡崎城は神君家康の生誕城として、5万石の石高に比しては大規模な城郭となった。東海道の宿場の中でも比較的大きかった岡崎宿は総構えの外であったが、町廻り19か町に編成され、総構え内の町々と同じに扱われた。

18世紀になって松平氏(松井松平家、宝暦12年(1762)～明和6年(1769))、本多氏(本多忠勝系・後本多家、明和6年(1769)～明治4年(1871))が入封するが、幕末に至るまで大規模な城郭整備は行われなかった。

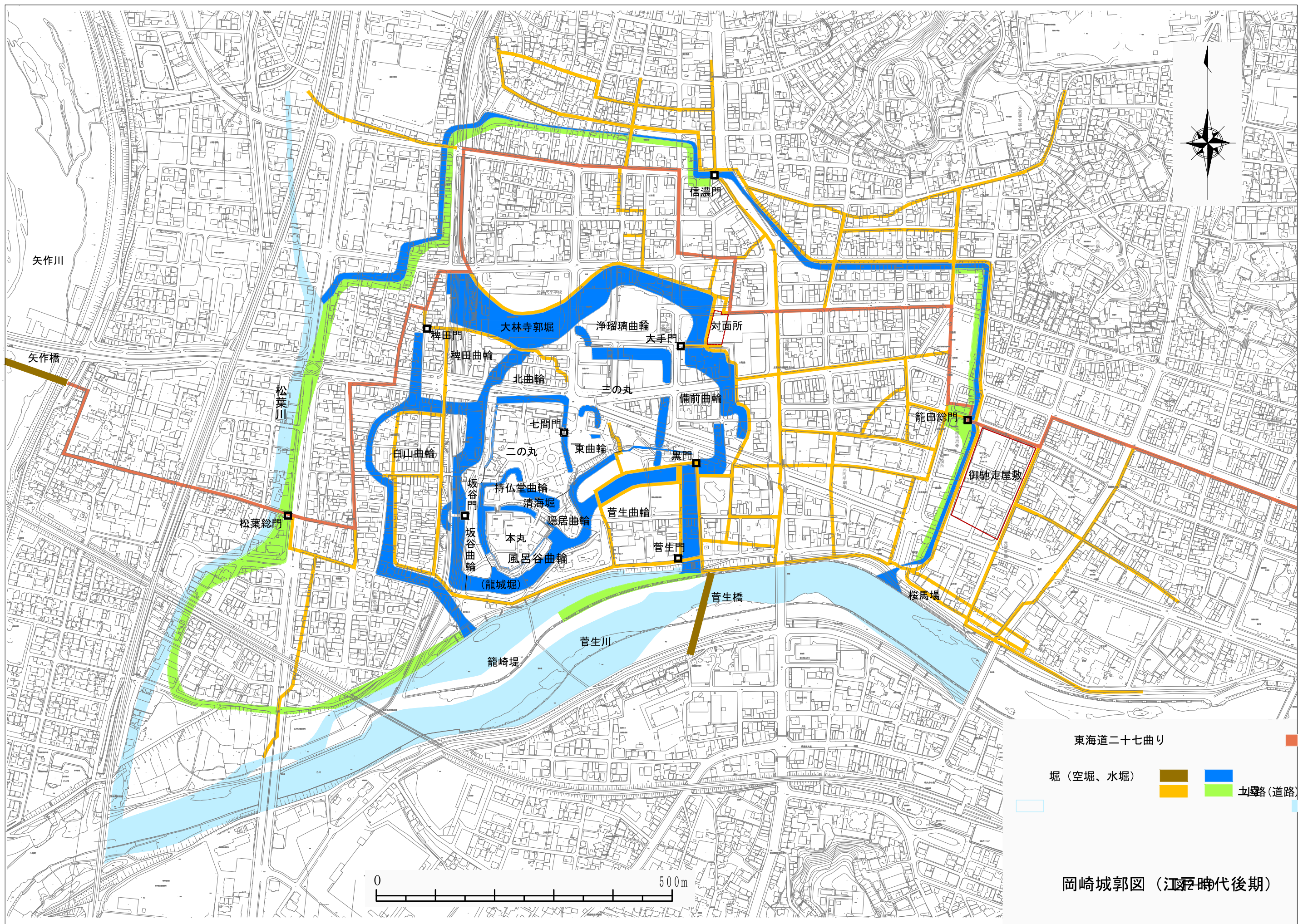
近世後半には矢作川やその支流は、花崗岩地帯であることから川底の堆積が早く、洪水が頻発した。洪水により年貢の免除、水が引いた後の堤防修理も必要となり、その負担は大きかった。近世後期には石垣修理の資金として、幕府より1万両と3千両の借財をしながらも、城郭の維持が行われた。



図 2-9 岡崎城絵図 (水野～後本多家時代・江戸時代後期の一部に加筆 岡崎市美術博物館蔵) 水野時代の図に掛紙をし、後本多家時代の組屋敷の変化等を描く。

表 2-2 岡崎城跡関係年表（中世～近世）

年代	城主	できごと	全国でのできごと
15 世紀半ば 享徳元(1452) ～康正元(1455)	西郷氏	西郷氏が明大寺に城館を築く 西郷弾正左衛門頼嗣が龍頭山に砦として岡崎城を築く	1467 応仁の乱
文明年間 大永4(1524) 享禄3(1530)～4 天文 11(1542) 天文16(1547) 弘治元(1555) 弘治3～永禄元 永禄3(1560) 永禄6(1563) 永禄6～7 ～永禄9(1566) 永禄9	松平氏 →今川 城代	松平信光が西郷氏を降伏、子光重が賀となり城主に 松平清康、山中城を攻め落とし明大寺岡崎城入城 松平清康が龍頭山の岡崎城を整備し移る 徳川家康(竹千代)が岡崎城で生まれる (家康 6歳) 戸田氏の裏切りで、織田の人質となる (家康14歳) 元服し松平次郎三郎元信と名乗る (家康16～17歳) 元康へ改名	1560桶狭間の戦い
永禄3(1560) 永禄6(1563) 永禄6～7 ～永禄9(1566) 永禄9	家康	桶狭間の戦いで義元討死、家康独立し岡崎城に帰城 三河一向一揆が起こる、翌年終結 (家康22歳) 家康へ改名 三河平定 (家康25歳) 徳川への改姓を勅許され、三河守に叙任	1573室町幕府滅亡 1582本能寺の変 1590秀吉の天下統一
元亀元(1570) 元亀3(1572) 天正18 (1590)	信康 →城代	浜松城を築き岡崎城を信康へ譲り移る (家康41歳) 本能寺の変。伊賀越えで岡崎に帰還 家康は関東移封となり、岡崎城に田中吉政が入城	
文禄3(1594) 慶長3(1598) 慶長6(1601)	田中 吉政 (豊臣)	吉政による総構え、城下町建設 秀吉が吉政に矢作川の築堤を命じる 矢作橋の架橋工事が始まる→慶長6年完成 東海道が城下に引き入れられる	1600関ヶ原の合戦
慶長7(1602) 慶長14(1609) 慶長年間	本多氏 (広孝系、 前本多)	本多康重、岡崎藩主となる 東の馬出し築造 慶長12年洪水の八町越え移住者の伝馬町新設 白山曲輪築造 家康の命により大林寺郭堀を拡張 (西の馬出し築造)	1603家康の江戸開幕 1614 大坂冬の陣 1615 大坂夏の陣
元和3(1617) 元和9(1623) 寛永年間 ～正保元(1644)		本多康紀、岡崎城天守を再建 秀忠上洛時の二の丸御殿を建造 本多忠利、菅生川端より稗田門までを石垣に改修 籠崎堤の築堤 菅生橋(殿橋)の架橋→正保2年完成	
正保2(1645)	水野氏	水野忠善の入城 城下8箇所にも木戸設置 領内を町廻りと十二手永に区分し治める 六地藏町・祐金町・唐沢町を郭外移転 総構えの籠田総門・松葉総門を設置、4木戸設置 御馳走屋敷を上肴町から伝馬町の南へ移転	
承応3(1654) 寛文10(1670) 正徳元(1711) 宝暦12(1762)	松平氏 (松井)	朝鮮通信使の岡崎泊(以後寛延元(1748)第1～11 次) 松平康福の入城	1716～45 享保の改革 1787～93 寛政の改革
明和6(1769) 天明3(1783) 文久3(1863) 慶応2(1866) 明治2(1869) 明治4(1871)	本多氏 (忠勝系、 後本多)	本多忠肅の入城 二の丸と東曲輪間・三の丸と切通し間の石垣修理 隠居曲輪等の石垣崩壊による修理願あり 菅生門外石垣等の崩壊による修理願あり 本多忠直が岡崎藩知事に 二の丸に額田県庁が置かれる	1841～43 天保の改革 1867 大政奉還 1868 明治政府発足 1869 版籍奉還 1871 廃藩置県



東海道二十七曲り

堀（空堀、水堀）

土路（道路）

岡崎城郭図（江戸時代後期）

④近代（明治以降の廃城～岡崎公園と市街地化）

明治維新後の廃藩置県により、明治4年(1871)岡崎城内に額田県庁が置かれた。以後、旧郭内には裁判所を始めとした公的機関が設置されていった。明治5年に旧城内は、家康誕生地にちなみ康生町と名付けられた。明治6年に廃城令が出されると、同年から7年にかけて岡崎城は天守を始め建造物は取り壊しをうけ、払い下げられた。このため、現在では城内に近世以前の建物は残されていない。

明治8年、岡崎城の荒廃を憂えた多門伝十郎^{たもんでんじゅうろう}を始めとした旧藩士達による保存運動が起き、県の許可を受けて本丸・二の丸跡は城址公園となった。しかし、それ以外の城郭部分は、同年貫通の往還道路に分断されたこともあり、市街地となっていた。明治13年、旧二の丸と東曲輪に愛知県公立病院岡崎支病院が新築移転された。明治15年には本丸の辰巳櫓跡^{たつみやぐら}に巽閣が建設された。明治36年には乙川堤防、同42年には乙川・伊賀川堤防にサクラ・カエデが植樹され、周囲の整備も進められた。

城址公園部分は明治28年に再び本多家に所有が戻った後、大正7年(1918)に寄附を受け市有となった。翌8年以降、公園改修5箇年計画により公園としての整備がなされていった。大正12年には菅生曲輪跡の一部が埋め立てられ、翌13年には運動場となり、二の丸跡に市立図書館が新設されている。こうした整備により来訪者も増え、昭和2年(1927)には愛知県新十名所の第1位に当選している。

昭和10年には国道1号が開通し、城内を南北に分断し、堀の一部は埋め立てられた。

昭和20年7月19日から20日にかけての米軍の空襲によって岡崎市街は壊滅し、県立病院や図書館も焼失した。昭和32年まで続いた戦災復興事業によって、近代적かつ利便性の高い市街地に生まれ変わった。

市民からの要望と昭和30年代の天守復興ブームに乗って、明治初期の写真を基に城戸久氏が設計した鉄筋コンクリート造り・3層5階建て・井戸櫓・付櫓付きの天守が昭和34年4月に復興された。

昭和37年6月15日、岡崎城跡は市の史跡に指定された。現在は98,908㎡が史跡指定地となっている。

昭和38年に、「花と産業科学大博覧会(岡崎博)」が旧三の丸等の内郭と岡崎公園にて催された(資料-2 ⑧)。昭和62年には、市制70周年記念事業として「葵博岡崎'87」が開催され、岡崎公園も会場となった。

最近では、岡崎公園として平成元年7月には日本都市公園100選に、平成2年4月には日本さくら名所100選に選定され、平成18年には岡崎城が日本100名城に選定されている。また、平成25年4月には「岡崎城天守」が岡崎市の景観重要建造物第1号に指定された。

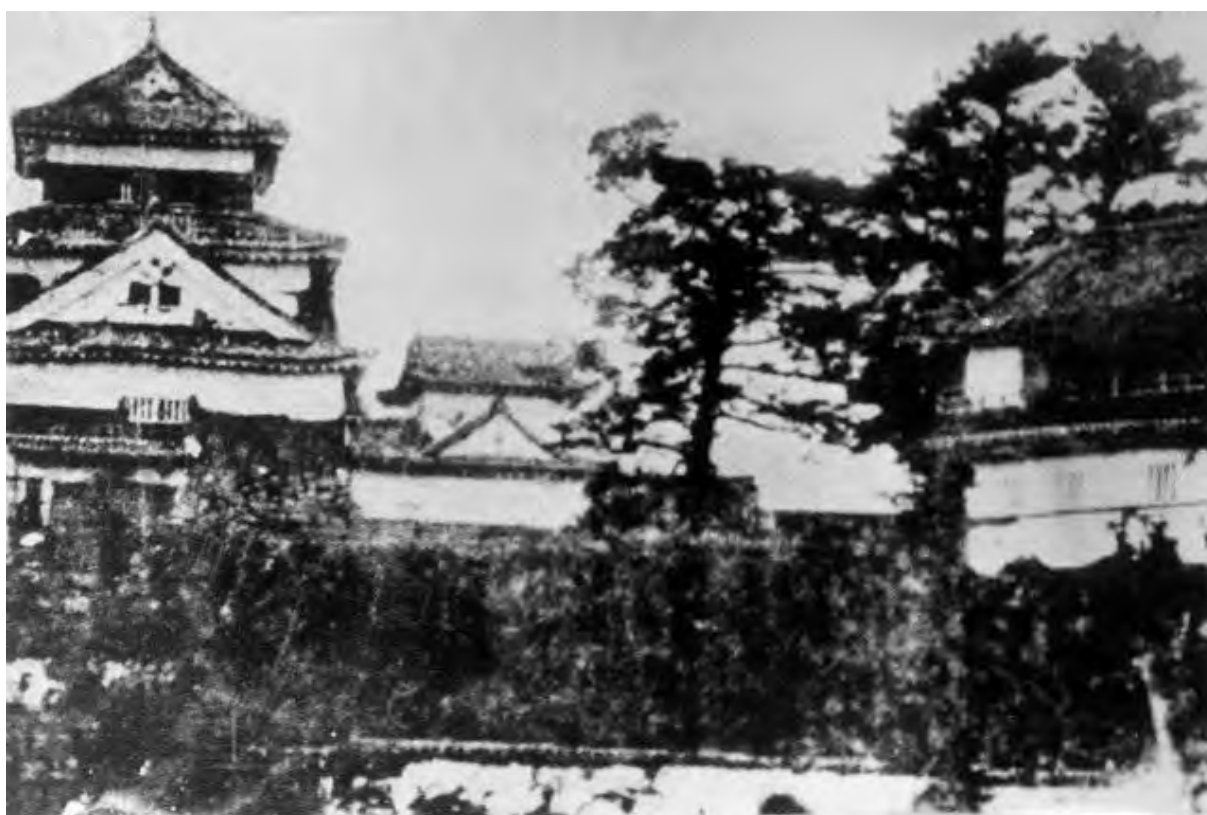


写真 2-3 復興天守(昭和34年復興)



(明治5年頃・南東より)

写真中央が天守。井戸櫓が付属している。左の櫓は月見櫓。右は辰巳櫓と推定される。



(本丸月見櫓方面(南)より)

左に大きな入母屋破風が付く天守に井戸櫓が並ぶ。右が月見櫓。手前に風呂谷曲輪の土塀が写る。

写真 2-4 本丸周辺の古写真(明治時代初期)

表 2-3 岡崎城跡の変遷（近代以降）

年代	城郭（総構え）		
	内郭（城内）		外郭（城下）
	本丸等曲輪、櫓等建造物	土塁、堀	武家屋敷、町家、街道
明治 4年（1871）	二の丸に額田県庁開設		御馳走屋敷に市学校開設
明治 5年（1872）	廃藩置県により康生町等の地名できる		
明治 6年（1873）～	岡崎城廃城（取り壊し）		
明治 8年（1875）	県より公園許可を受ける	郭内を東西に貫通する往還道路開通	名古屋裁判所岡崎支庁開設
明治10年（1877）	「岡崎公園」となる		
明治13年（1880）	二の丸、東曲輪に愛知病院岡崎支病院建設		
明治15年（1882）	本丸に巽閣建設	康生町に額田郡役所移転	
明治22年（1899）	岡崎三百年祭（徳川家康入府300年）開催		
明治36年（1903）	岡崎町が乙川堤防に桜・楓を植栽	伊賀川改修（堀の一部を利用）	
明治42年（1909）	乙川堤防、伊賀川堤防に桜・楓を約3,000本植栽	～明治44年	
大正 6年（1917）	岡崎公園の設計を本多静六博士・田村剛氏に依頼		
大正 7年（1918）	後本多家の寄附により岡崎公園市有地化		
大正 8年（1919）	公園改修事業開始（5箇年計画） 岡崎公園の樹木は7,300株		
大正11年（1922）	二の丸に市立図書館建設		
大正14年（1925）	菅生曲輪に運動場拡張、観覧席完成	大林寺郭堀、総堀の一部、並びに旧道が残る。	
昭和 4年（1929）	国道1号開通（城内を南北に分断、堀の一部埋め立て）		
昭和10年（1935）	龍城堀に神橋、菅生曲輪に庭球場、児童遊園完成		
昭和15年（1940）	坂谷曲輪に坂谷橋完成		
昭和20年（1945）	岡崎大空襲（城下一帯焼失、城内では図書館、市民病院焼失）		
昭和21年（1946）～	戦災復興事業（旧道拡幅等、町並みが大きく改変）		
昭和33年（1958）			
昭和24年（1949）	市民病院移転		
昭和25年（1950）	第5回国民体育大会開催	大林寺郭堀、総堀の殆どが滅失	
昭和26年（1951）	岡崎公園、乙川、伊賀川に桜の補植		
昭和29年（1954）	岡崎公園、乙川、伊賀川に桜の補植		
昭和32年（1957）	岡崎公園、乙川、伊賀川に桜の補植		
昭和32年（1962）	二の丸に小動物園開園、龍城堀総ざらえ、伊賀川等に桜補植		籠田公園、御旗公園開設
昭和33年（1963）			
昭和34年（1959）	天守の復興	二の丸の堀を埋立て	
昭和35年（1960）	二の丸に洋風庭園、花時計建設、東曲輪に駐車場完成		
昭和37年（1962）	市史跡指定になる		
昭和38年（1963）	花と産業科学大博覧会（岡崎博）開催		
昭和40年（1965）	本丸に巽閣再建、菅生曲輪に運動場のスタンド建設		
昭和42年（1967）	菅生曲輪に弓道場、体育場建設	大林寺郭堀に岡崎スポーツガーデン開設	
昭和45年（1970）	東曲輪跡の駐車場を立体化		
昭和53年（1978）	岡崎城天守のライトアップ開始		
昭和56年（1981）			籠田公園リニューアル
昭和57年（1982）	二の丸に三河武士のやかた家康館開館		
昭和62年（1987）	葵博岡崎'87開催（岡崎公園他が会場）		
平成元年（1989）	菅生曲輪に城南亭、葵松庵、二の丸に能楽堂完成		
平成 2年（1990）	岡崎公園が日本さくら名所100選に選ばれる		
平成 5年（1993）	二の丸に現大手門完成、坂谷曲輪で坂谷橋が改築	岡崎スポーツガーデン閉鎖	
平成 7年（1995）	菅生曲輪でグラウンド、テニスコート等が廃止		
平成10年（1998）	龍城堀浄化事業完成		
平成16年（2004）	菅生曲輪（旧テニスコート）に駐車場（乗用車）建設		
平成18年（2006）	東曲輪（旧立体駐車場）に駐車場（大型バス）建設		
	岡崎公園が日本の歴史公園100選に選ばれる		
	岡崎城が日本の名城100選に選ばれる	大林寺郭堀に市立図書館（りぶら）開館	
平成21年（2009）	二の丸に観光案内所完成、井戸跡整備		
平成22年（2010）	東曲輪に東隅櫓、築地塀完成		
平成25年（2013）	「岡崎城天守」が市景観重要建造物に指定		
平成26年（2014）	坂谷曲輪に産湯の井戸の取水整備		
平成28年（2016）	市史跡追加指定	龍城神社境内地を追加指定	

(2) 岡崎城の各曲輪の概要

①内郭部分

岡崎城の内郭は、前述のとおり享徳元年(1452)から康正元年(1455)の西郷氏による築城後、享禄4年(1531)入城の松平清康から前本多家3代本多忠利の時代にかけて整備・拡張されたと考えられる。

浄瑠璃曲輪から稗田曲輪にかけての北側に延びる最大幅 60m にもなる大林寺郭堀など、各曲輪周囲の堀によって外郭と画されていたが、現在では埋め立てられている。明治8年(1875)には東海道の屈曲を解消するため、備前曲輪・三の丸の中央を抜けて坂谷曲輪・白山曲輪を通り板屋町へ出る往還道路が貫通した。この東西に貫通する往還道路に替えて昭和8年(1933)に国道1号が開通している。これにより内郭は国道1号で南北に分断され、内郭北側は現在市街地となっている。内郭南側は岡崎公園として公園施設が整備されており、昭和37年に市史跡指定地になっている。



図 2-11 岡崎城内郭の曲輪等の名称
 (「岡崎城絵図」後本多家時代・江戸時代後期・和田家文書に加筆 岡崎市美術博物館蔵)

1. 本丸（八幡曲輪）

築城以来、岡崎城の中心部分である本丸は、近世には北西隅に元和3年(1617)に再建された天守、南に月見櫓、東に辰巳櫓（巽櫓）が建っていた。享禄3年(1530)に八幡社が松平清康により安城から城内鎮守として移され、家康または本多康重の時代に鬼門の甲山へ移されるまで置かれたことから、八幡曲輪とも呼ばれた。

廃藩後の明治6年に廃城令が出されると、翌年にかけて天守を始めとした全ての建物は取り壊し及び払い下げをうけた。天守は、市民の要望により昭和34年に復興されている。また、寛永年間(1624～1643)に前本多家3代忠利により東照宮が建立された。東照宮は、明和7年(1770)に後本多家初代^{たどし}忠肅により三の丸に移され、本丸には本多忠勝を祀る映世神社が建てられた。両社は明治9年(1876)に龍城神社として合併し、現在地に本殿が建てられた。

平成12年度の巽閣建て替えに先立つ発掘調査で、辰巳櫓関連の遺構が確認されており、他の本丸内建物の遺構も遺存していると推定される。また、本丸内の建物は、概略ではあるものの絵図に姿図または平面図が描かれており、且つ天守や月見櫓についてはやや不鮮明ながら写真も残されている。

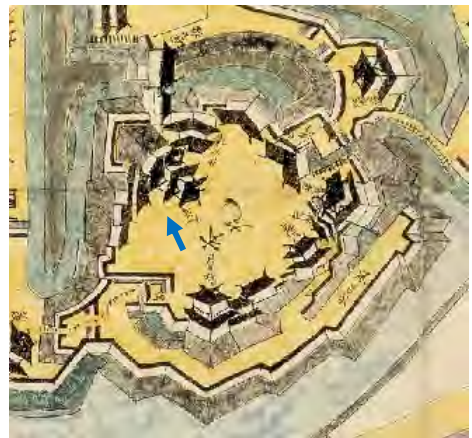


写真2-5 本丸天守台石垣
(図中→は写真撮影方向)

2. 持仏堂曲輪

曲輪名は、家康が妙源寺（大和町）より申し受け所持した^{えしんそうず}恵心僧都作の阿弥陀仏を安置した堂が所在したため名付けられたとされる。本丸の北側に位置し、持仏堂曲輪は廊下橋を介して本丸天守に通じていた。本丸と持仏堂曲輪の間には、創築者西郷頼嗣（清海入道）の名の付いた清海堀が切られており、細い帯曲輪を囲み二重となる中世の空堀であり、幅が狭く湾曲する。二の丸から本丸へ至る通路は、虎口からこの帯曲輪で180度折れ曲がり、細長い帯曲輪に本丸から横矢を掛ける構造となり、非常に厳しい防御の構えを作り上げていた。本丸御門前の馬出しと持仏堂曲輪は重ね馬出しの構造となっており、また隠居曲輪も馬出しの機能をもっていた。また、内側の空堀の本丸側は急斜面の土塁であり、外側は近世初期に積まれた大きく内湾する輪取りの



写真2-6 清海堀の土塁と石垣

石垣となり、土造りと石造りの双方が見られる。数少ない家康在城時の岡崎城の構造が知られる場所となっている。

持仏堂建物跡には、大正5年より飲食店が建っている。廊下橋は、明治44年に土橋が改修され大正9年にアーチのある石橋となっている。絵図に描かれている持仏堂曲輪から二の丸に通じる門及び土塀の基礎石垣はそのまま残されている。曲輪の石垣天端には、銃眼となる石穴が残されている。曲輪内については、近代以降の建物は木造平屋建ての飲食店のみであり、近世の建物跡の遺構等が残されている可能性が考えられる。

3. 二の丸（御誕生曲輪）

本丸・持仏堂曲輪の北側に位置する。家康が生まれたのがこの曲輪であったため御誕生曲輪とも称される。城主が居住する御殿が置かれていた。御殿の屋敷図として「参州岡崎二之丸御住居図」等が存在する。

廃藩置県後の明治4年から5年には、額田県県庁が置かれた。大正12年には市立図書館が開設されたが、昭和20年に空襲で焼失した。昭和32年～57年には動物園も設置されていた。現在、二の丸西側には「三河武士のやかた家康館」が建てられている。この建設に先立つ昭和55年の発掘調査では、二の丸御殿に関係した遺構が確認されている。また、曲輪の北東には国道1号に面して平成5年に「大手門」と称して建設された公園の門があるが、この門の南には七間門といわれた二の丸正門があったと推定される。

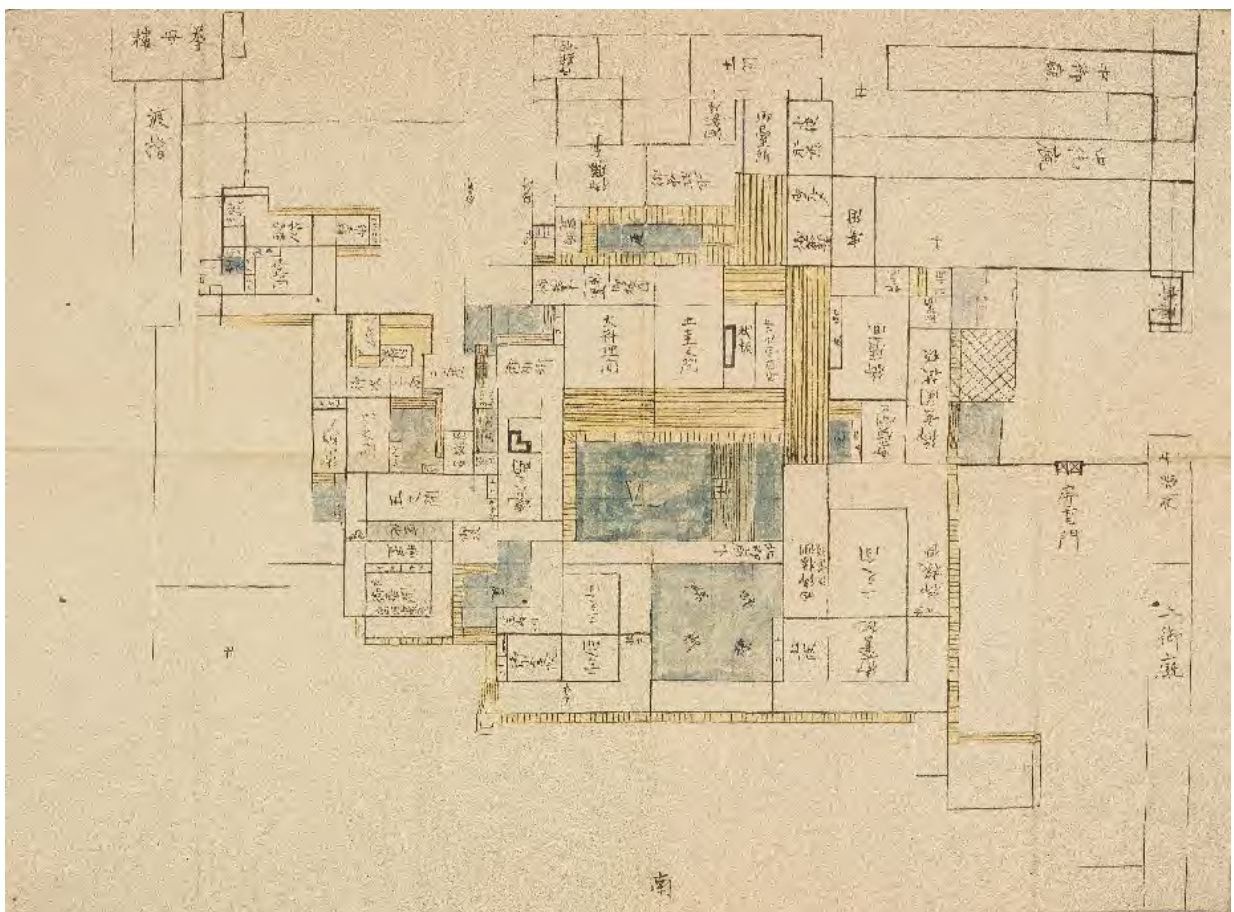


図 2-12 参州岡崎二之丸御住居図（安永6年(1777)写・和田家文書 岡崎市美術博物館蔵）



写真 2-7 伊賀川から望む二の丸・坂谷曲輪
(昭和初期頃・中央一段上が旧図書館・南西から)



4. 三の丸

二の丸の東の段丘の尾根上に位置し、重臣が居住する武家屋敷が置かれた。三の丸に居住し近世後期の後本多家家老をつとめた都筑惣左衛門等の屋敷図が残されている。また、後本多家時代には、本丸から三の丸へ移した東照宮が置かれ、本丸で本多忠勝を祀る映世神社と東照宮両社の別当寺となる歓城院が置かれた。

現在、三の丸は国道1号により分断されており、南側の一部が岡崎公園内に含まれるのみで、北側は商業地区を中心とした市街地となっている。国道1号に面し菅生曲輪に下る南（東）切通し脇には、国道1号の拡幅時に

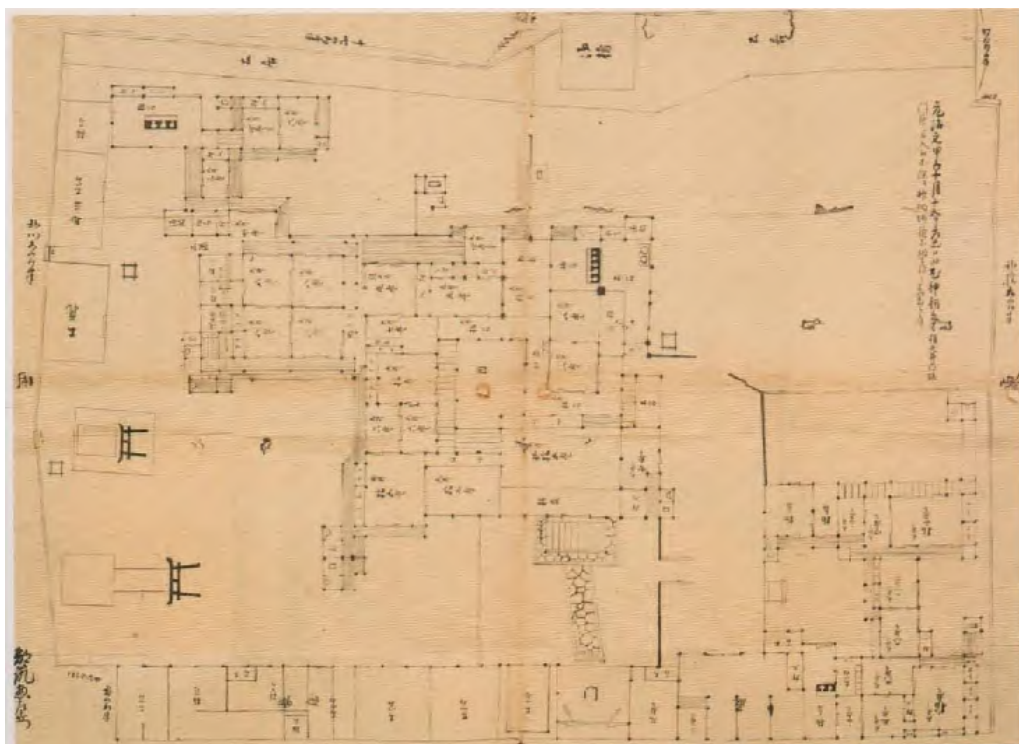


図 2-13 三の丸の武家屋敷 都筑惣左衛門屋敷図
(後本多家時代・江戸時代後期 岡崎市美術博物館蔵)

付近の塚から出土した浄瑠璃姫の墓とされる^{ほうきょういんとう}宝篋印塔が立てられ、昭和12年に周辺と共に整備されている。

また、平成23年度の発掘調査では切通しの東側で空堀の「三日月堀」が検出されており、当初の構築は中世までさかのぼり、岡崎城の構造変化を考察するための貴重な遺構である。

5. 備前曲輪

曲輪の名称は、近世初期に三河国で検地などを行った伊奈備前守忠次が居住したことによるとされる。三の丸の東に位置し、三の丸同様に家老を始めとする重臣の武家屋敷が置かれていた。17世紀の前本多家時代の絵図には三の丸と表記されている。城東の外郭への出入口として慶長7年(1602)に整備された丸馬出しを備えていた。なお、この馬出しは近世初期において岡崎城の大手であった可能性がある。



現在は市街地となり、ビル街が広がっている。備前曲輪外堀の外郭ラインが、大手門南の細かく折れ曲がる小路や、東の丸馬出しの弧を描く地割が現在の地番図に見ることができる。

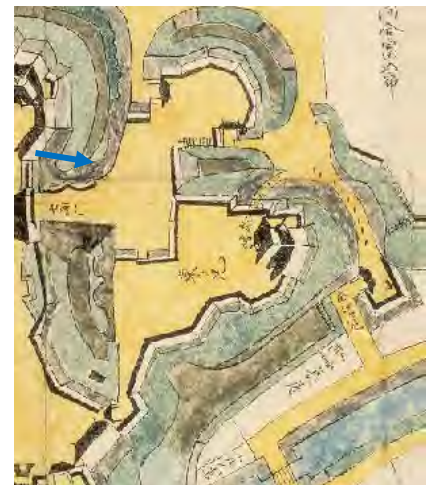
6. 東曲輪（東丸）

二の丸と三の丸の間に位置する。家康正室の築山御前が居住したという伝承があるが、近世には「御花園」とも呼ばれ、東の隅櫓以外に建物はなく空隙地であったと推定される。

明治13年には愛知県公立病院岡崎支病院が開設し、昭和20年に空襲で焼失した。曲輪中央部は、昭和45年に地階のある3階建て駐車場が建てられ、平成18年度には平面の岡崎公園バス駐車場となっている。その際の発掘調査で二の丸七間門前の土橋の石垣と推定される石垣遺構等が確認された。また、平成19・20年度には発掘調査で南東角の東隅櫓の櫓台の一部が検出され、南の菅生曲輪に面する版築土塁の法面や堀の礎石等が確認され、平成22年には切通しを臨む南東角の東隅櫓が木造で復興された。



写真 2-8 二の丸から東曲輪 愛知県公立病院岡崎支病院
(大正12年旧図書館屋上より・西から)



東曲輪横には南（東）切通しが、本丸周辺以外では唯一の良好な遺構として地表に残存している。この切通しは、岡崎城が立地する丘陵の尾根筋を切り分けており、当初は空堀として構築されたものが後に堀底道として利用されたと考えられる。

7. 隠居曲輪

本丸の東側、菅生曲輪との間に位置し、細い通路を介して持仏堂曲輪の東側（本丸馬出し）と二の丸とに接続する。曲輪内に高低差があり、段丘から低地の水堀に向かい張り出していた。菅生曲輪とは龍城堀により隔てられていた。曲輪の周囲は馬蹄形の曲線を描いている。

大正12年の運動場造成で堀が埋め立てられ、以降は菅生曲輪と繋がっている。廃城後は一時、梅林となっていたが、大正7年と昭和2年に曲輪中央に飲食店が2軒建てられている。



写真 2-9 菅生川端から望む本丸の辰巳櫓跡（奥）と隠居曲輪（右）・風呂谷曲輪（左）（大正時代・南から）

8. 菅生曲輪

本丸から隠居曲輪を隔てて東に位置し、本丸より約8m低い低地上にある。曲輪名の由来は菅生川に面していたためと推定される。武家屋敷、侍長屋が置かれていた。前本多家時代の絵図には既に描かれており、屋敷割も確認できることから、この時期までに曲輪が成立していたことが分かる。曲輪東側の北で黒門、南で菅生門により外郭と往来し、現在も残る東曲輪横の南（東）切通しで三の丸へと通じていた。

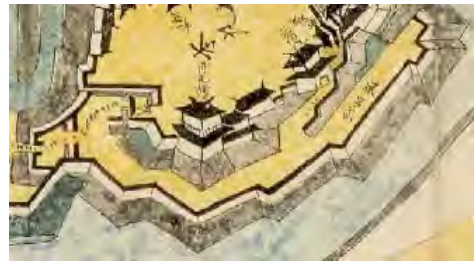


廃城後は堀部分が一時蓮池となっていたが、大正12年より運動場として埋め立てられた。現在は、曲輪の北側が公園に、南側がホテルや住宅などが建ち並ぶ市街地になっている。平成12年に運動場跡地の発掘調査が全面的に行われ、堀や土橋などの縄張り遺構、^{えなぐら} 胞衣皿埋納遺構など、近世武士の生活がうかがわれる遺構が多数確認されている。

9. 風呂谷曲輪

本丸南を取り巻く腰曲輪状の曲輪で、龍城堀に沿う土堀の他は建物等は存在していなかった。本丸との比高差が約8mあり、石段を上り二階門（風呂谷門）から本丸へと通じる。

現在、龍城堀上に石段下付近から菅生川端へ渡る「神橋」が架けられている。



10. 坂谷曲輪

本丸から二の丸の西側にかけて西に延びる帯曲輪で、2箇所にも隅櫓が置かれていた。本丸天守からほぼ真西の位置には、枳形門を構成する坂谷門と一対になる丸馬出しが、西の白山曲輪に向けて造られていた。

現在は坂谷門の基礎石垣がその位置を知らせている。近世文書に家康産湯の井戸と伝わる石組み井戸、昭和11年に石塔が建立されたえな塚が残されている。



11. 白山曲輪

本多康重の時代に整備された曲輪で、坂谷曲輪の西に位置し、馬場などがあつた。家康が永禄9年(1566)に上野国新田より勧請した白山社が名称の由来である。

明治45年から大正4年にかけての伊賀川付替え工事で、この曲輪と坂谷曲輪の間の堀を利用する形で流路が開削された。現在は宿泊施設や住宅街になっている。

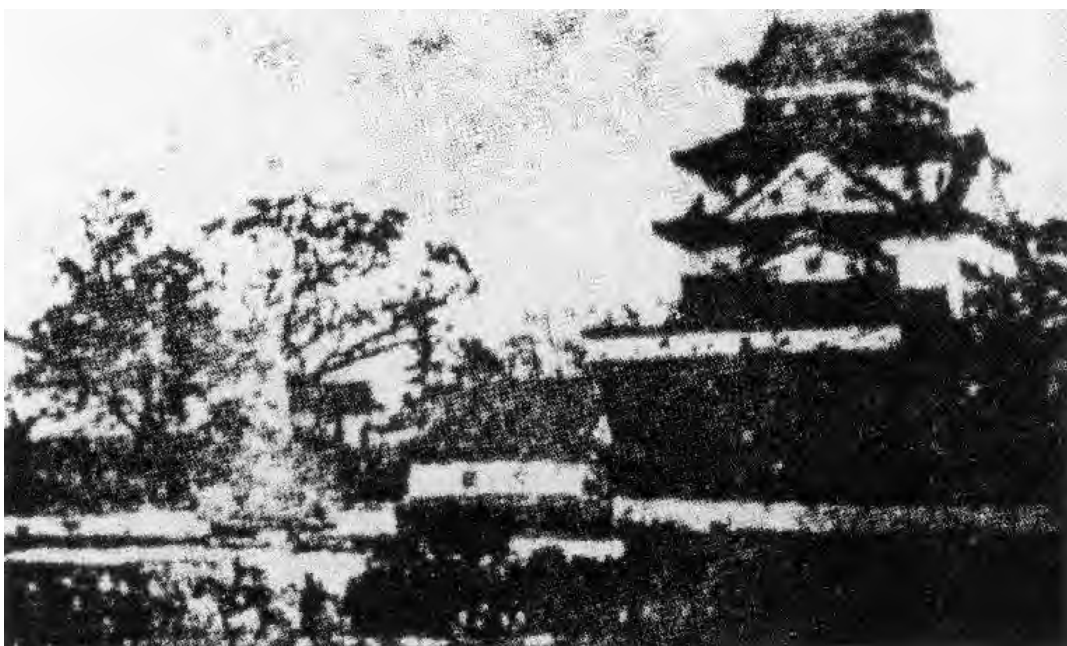


写真 2-10 白山曲輪から見た本丸と坂谷曲輪（明治初期・西から）
坂谷門丸馬出しの土堀と枳形門の奥に本丸天守を望む。

現白山神社の本殿西側では、白山曲輪の外堀を埋めた跡が康生町と板屋町の町界であり、半円を描く帯状の区画となって残されている。

12. 稗田曲輪

白山曲輪の北に位置し、武家屋敷や城米蔵が置かれていた。岡崎城の搦手門となる稗田門が東海道に面して構えられていた。街道に直接通じるため、稗田門は稗田櫓の両側を取り巻く二重の門をもつ厳重な枡形構造を採っていた。

大正4年に曲輪を貫通して伊賀川が開削され、現在、南側は国道1号が東西に横断し、市街地となっている。



13. 北曲輪

二の丸の北、稗田曲輪の東に位置し、侍長屋や厩が置かれていた。北曲輪と三の丸の間には北切通しが切り込まれ、東曲輪東の南（東）切通しと一連となり、岡崎城が立地する丘陵の尾根筋を分断している。

岡崎城の建物として鍛冶町の天野邸に移築された門は、北曲輪門であるとの伝承がある。曲輪は現在、市街地となっている。



14. 浄瑠璃曲輪

三の丸の北に位置し、武家屋敷となっていた。名称は、松平清康により持仏堂曲輪からこの曲輪内に移された光明院安西寺浄瑠璃薬師堂による。岡崎城の正門である大手門はこの曲輪の東に構えられていた。大手にふさわしく、大手門は冠木門（高麗門）と多聞櫓（櫓門）で構成される枡形構造である。連尺先大手といわれ、正保年間(1644～1648)前後の前本多家、水野家による木戸設置の段階で大手として整備されたとする説があるが、なお今後の検討の必要がある。



昭和40年代の市街地再開発事業の中心地であり、商業地区を中心とした市街地となっている。現在も、浄瑠璃寺が旧曲輪内にあり、また、曲輪北側の外郭線が康生通西3丁目と材木町1丁目の町界として残されている。



図 2-14 龍城図 (江戸時代・西側からの内郭俯瞰図 岡崎市美術博物館蔵)

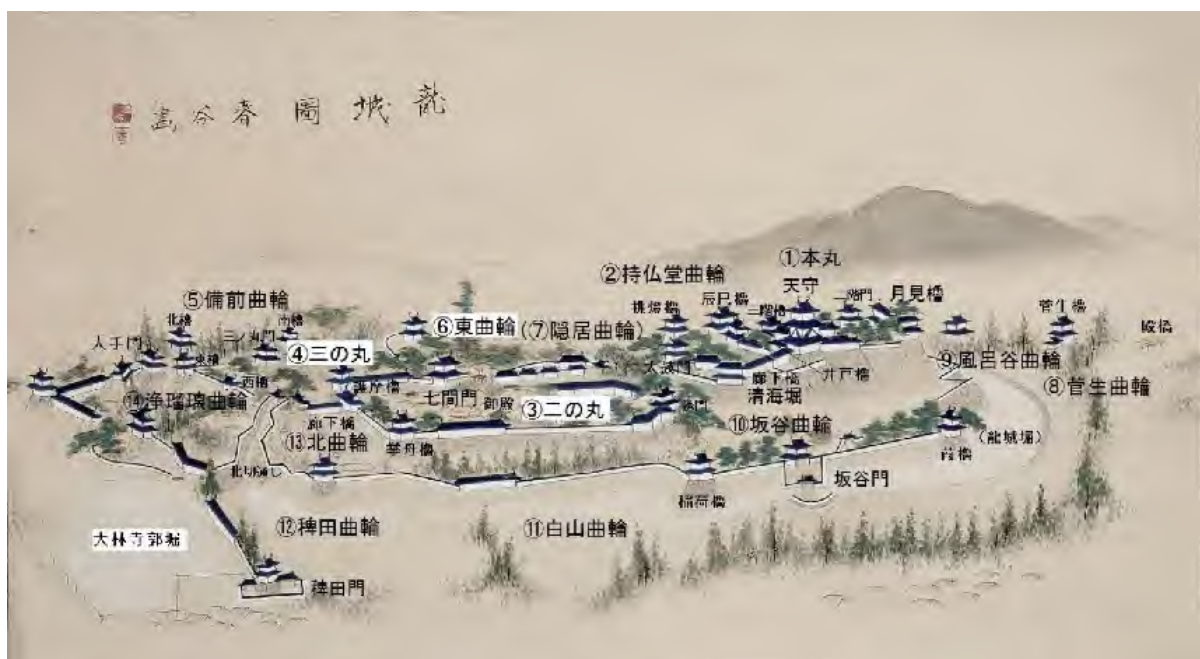
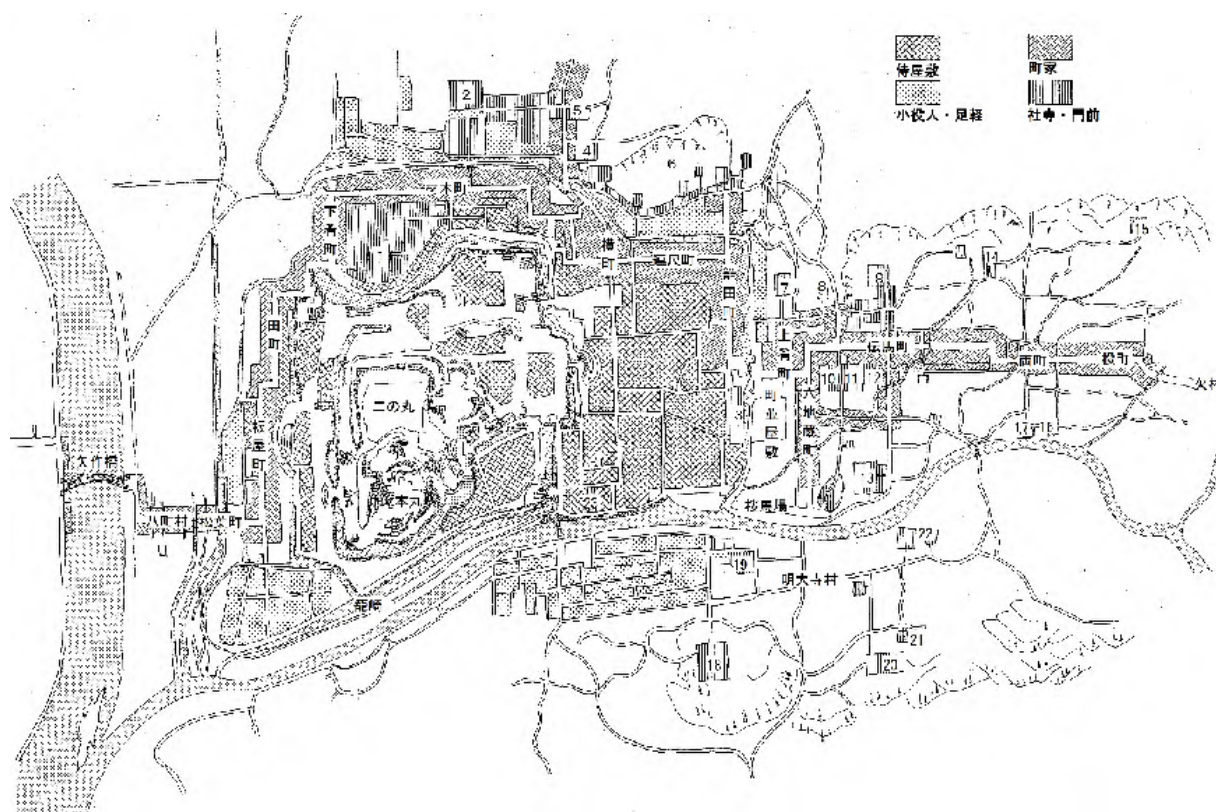


図 2-15 建物対照図 (図 2-11、資料-22・23 参照)

②外郭部分（総構え内）

岡崎城の城郭範囲は、天正18年(1590)に豊臣秀吉の命により入城した田中吉政の時代に、田中堀とも呼ばれる城下町を内包する総堀が巡らされたことにより決定された。この際に城下町が造成され、東海道が城下に引き入れられた。慶長6年(1601)に入城した初代岡崎藩主の本多康重時代には、矢作橋の架設と伝馬制度設置により東海道が整備された。東海道は「二十七曲り」といわれるほど屈曲しながら内郭の北側を大きく周り、籠田町や郭外の伝馬町・両町といった新設の町を含め沿道は岡崎宿として大いに栄えるようになった。

正保2年(1645)に入城した水野忠善の時代には、総構えの出入口である東の籠田総門、西の松葉総門を設置し、士庶混住の地区を区分して、城下町の整備が完成された。また、朱印寺院として松平氏・徳川家ゆかりの寺や中世以来の歴史をもつ寺が、多くの門前町を形成し、これらは城下町と入り組んで町を築いていた。旧城下町は職業と密接に関係する名称がつけられ、現在でも籠田町・連尺町・材木町・板屋町・田町・伝馬町・魚（肴）町・六地藏町・唐沢町・久右エ門町・祐金町・十王町・両町・能見町・六供町など、当時の町名が使用されている町が多い。



- | | | | | |
|--------|---------|--------|----------|----------|
| 1 大林寺 | 6 甲山寺六坊 | 11 善立寺 | 16 若宮八幡宮 | 21 安心院 |
| 2 松應寺 | 7 誓願寺 | 12 西照寺 | 17 朝日社 | 22 成就院 |
| 3 総持尼寺 | 8 宝福寺 | 13 満性寺 | 18 龍海院 | 23 菅生天王社 |
| 4 源空寺 | 9 随念寺 | 14 極楽寺 | 19 万徳寺 | |
| 5 覚恩寺 | 10 専福寺 | 15 大泉寺 | 20 六所大明神 | |

図 2-16 岡崎城下町図 （後本多家時代・江戸時代後期・出典：新編岡崎市史第3巻）

内郭に接し、岡崎城大手門の北西には対面所が置かれていた。維新後の明治2年(1869)～4年まで、対面所跡に藩校である允文館・允武館が設置された。それまで藩の家中教育は、師範の邸内で行われており、岡崎藩で初めての文武の藩校であった。

郭外にも、籠田総門南東の籠田郵便局から旧伝馬公設市場付近に、朝鮮通信使や御茶壺道中などの公的来客を接待するために設けられた御馳走屋敷（町並屋敷）があった。また、御馳走屋敷の南の菅生川端には、脇に桜並木があったことから名付けられた桜馬場が設けられていた。

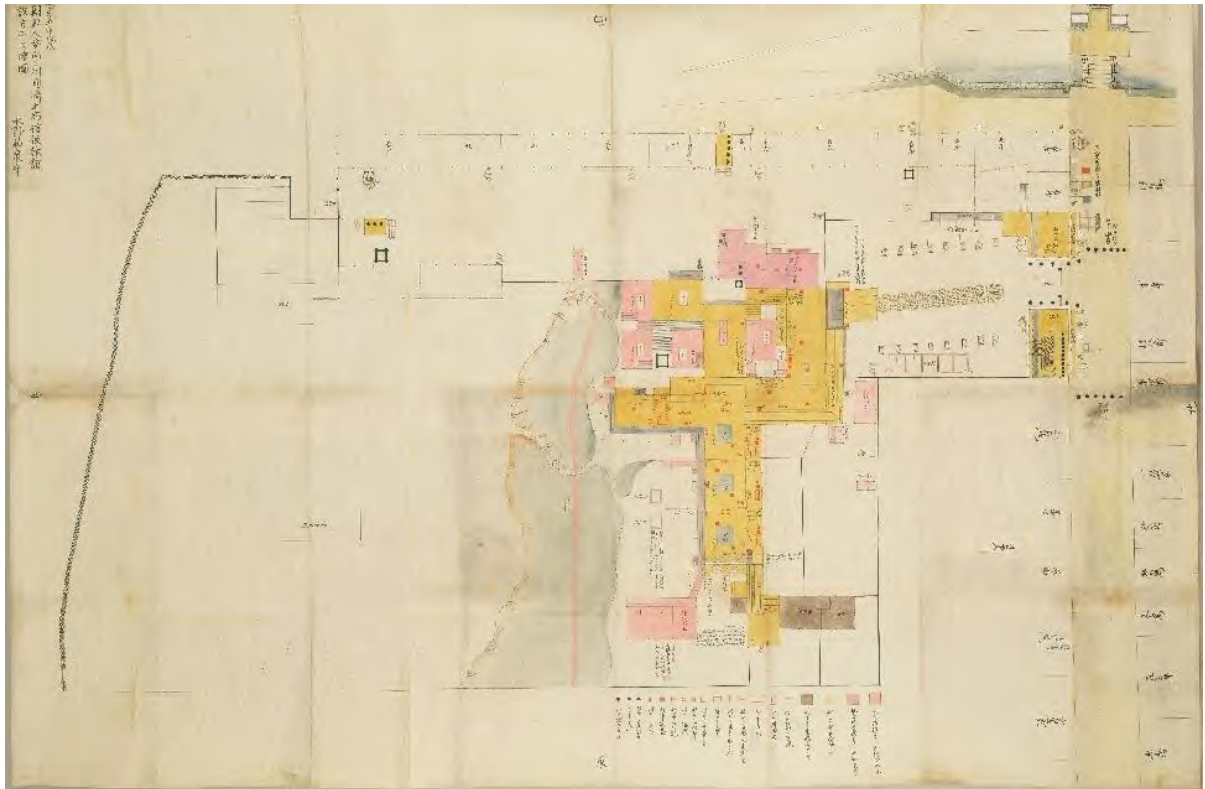


図 2-17 町並屋敷（御馳走屋敷）図
(延享5年(1748)朝鮮通信使岡崎止宿時の作図 岡崎市美術博物館蔵)

矢作川の舟運とつながり舟運の要所となった岡崎城下では、信州への中継地の一つとして、物資の陸揚げや積み出しが行われた。菅生川沿いには荷物の積み下ろしをする土場が置かれ、江戸時代には下流から御用土場、桜馬場土場、満性寺土場があった。各土場の位置は定かでないが、近世後期の絵図（資料-7 ④）には、菅生門外の籠崎堤の付け根付近に川から上がる雁木（石段）が描かれている。また、桜馬場には川へ突き出す石垣が描かれ、他の絵図にも「舟渡」と記されており、それぞれ御用土馬、桜馬場土場である可能性が考えられる。

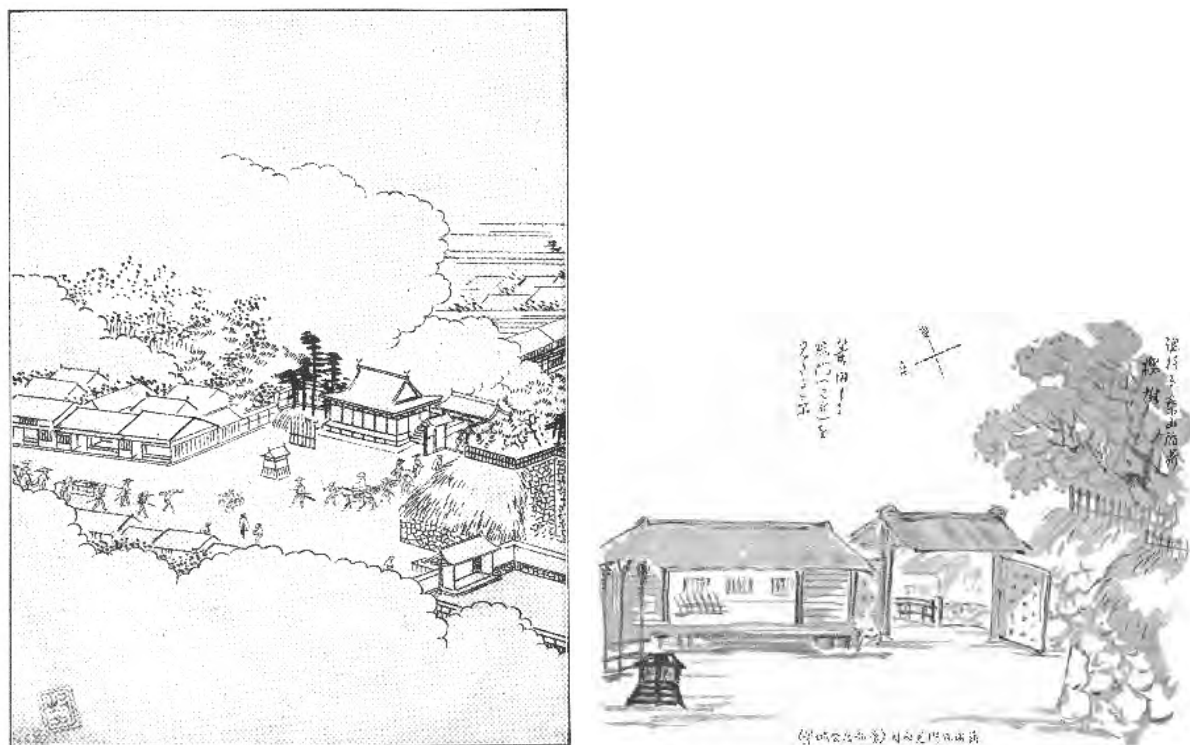


図 2-18 籠田総門の図 (左：石川貫河堂画 右：鷹部屋雲城画 江戸時代後期)
(出典：岡崎市史第2巻)

しかし市の中心街は、昭和20年(1945)7月19日から20日未明にかけての岡崎空襲により焼失し、その後の戦災復興事業や昭和40年代の商業地開発により近代的な都市が形成されていった。

近世の様子をしのぶものは多くは残されていないが、上記の歴史的町名を始め、菅生川(乙川)堤防の菅生川端の石垣遺構のほか、大林寺郭堀等の外堀や総堀の堀跡を示す段差地形や地境、東海道二十七曲りの当時の道幅を残す箇所、街道沿いの「唐弓弦」看板のある町家や細長い地割、一部の曲輪跡碑や両総門跡碑などがある。

内郭の北を画する大林寺郭堀は、本丸が築かれた龍頭山と大林寺が置かれた天神山の間に入り込む谷地形を利用した外堀である。この堀は、家康の命により前本多家初代康重時代の慶長年間(1601～1615)頃に大きく開削された記録(「慶安年間書上控」大林寺文書)があり、幅33間(約60m)を測る城内で最大幅の堀であった。戦後まで材木貯蔵池として利用されていた。これまで数度の発掘調査で堀の肩の石垣が確認されている。平成18年度の調査では、浄瑠璃曲輪北側で堀の外側にあたる法面に高さ7m以上あり小段に犬走りを伴う野面積み石垣が確認された。



写真 2-11 大林寺郭堀 (南から・大正9年)
(出典：定本西三河の城)

また、内郭の南側の菅生川には前本多家3代忠利により、寛永年間(1624～1643)～正保元年(1644)までに籠崎堤が築かれ、菅生川端に石垣が構築された。これにより、天然の堀である菅生川に、さらに旧河道が中堀となることで二重堀化されたことから、城郭南側の防御と治水の機能が高められた。この菅生川端石垣は、平成27年度のかわまちづくり事業に伴う発掘調査で、3箇所の横矢枡形をもち延長で約400mとなる石垣が遺存している状況が確認され、平成28年度の発掘調査で胴木の確認と石垣の高さが約5.4mあることが確認されている。

総構えについて、北側の総堀は、現在の大林寺辺りの天神山北側にあった谷地形を利用し、西側の総堀は現在の国道248号付近にあった松葉川を使用していた。一方、東側の総堀は現在の中央緑道の東側に位置し河岸段丘に入り込む小谷を利用したとみられ、戦後まで堀が残り(資料-4 ②)、籠田総門から南側は段丘から落ちる滝状の流れとなっていた(写真2-12)。

総堀の跡については、現在も地形的に確認できる場所がある。八幡町の二七市通りの南側では敷地奥が石垣等により一段高くなっており、総堀と土塁の境が高低差として表れている。また、北側の総堀にあたる御旗公園(材木町)から西方の伊賀川辺りまで、旧東海道二十七曲りに沿った敷地の北側の高さが下がっており堀跡の位置がわかる。



写真 2-12 総堀(獅子ヶ瀧)
(南から・大正時代)
(出典：岡崎市史第7巻)



図 2-19 参陽岡崎府内之図 (水野時代・明和8年(1771)写に加筆) 岡崎市美術博物館蔵